



TITLE:

Informal Meeting「物性グループのあり方」(<特集>我国に於る物性物理の研究体制について)

AUTHOR(S):

編集部

CITATION:

編集部. Informal Meeting「物性グループのあり方」(<特集>我国に於る物性物理の研究体制について). 物性研究 1969, 12(1): 97-100

ISSUE DATE:

1969-04-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87139>

RIGHT:

Informal Meetine

「物性グループのあり方」

編 集 部

昨今の学園紛争の中で提起されて来た「学問とは何か?」「大学とは何か?」という問いかけ、「体制に丸がかえになった科学技術」という認識を物性研究者として如何に受けとめるか。物性百人委員改選が近づいた現在、過去の選挙等への対処や地方大学問題の運動等を現在の視点から検討し、物小委、百人委あるいは共同利用研等が本来の機能・役割を果たしているか、また果しうるものであるかを考えよう。

このような趣旨で4月1日学習院大学において、我々編集部有志は「物性グループのあり方」という討論会を物理学会の informal meeting として主催した。

主催者としては勿論まとまる話はまとめるべきだが、安易に結論を急がず、まず問題点を掘り起こし、主催者をも含めて会の参加者や、今この報告を読んで下さる方々の間から討論と行動が起ることを期待して会を進めた。

会場の位置等の悪条件に抱らず、40名以上の参加者を得て盛会であった。

主催者の呼びかけや、会の名称・内容・性格が幾分あいまいであったことや、余りまとめようとしなかったことに批判もあったが、3時間に及ぶ討論は主催者としては上記の趣旨からいって成功であったと考える。

以下は当日の諸発言を主催者の判断と責任でまとめたものである。対立する諸発言者を区別してまとめるため「 」を多用したが、実際の発言順ではない。またこの報告での分類も、別々の討論としてなされたわけではなく、実際には過去の運動・地方大学運動の報告と自由討論の3部分である。種々の分類に属する発言が入り組んでいた中から「適当に」整理・配列したものである。勿論主観を全く排すことは不可能であるが、出席者には客観的にまとめようとした態度を御理解頂けよう。

§ 1. 過去の運動

物性百人委，物小委，物性研共同利用施設委等に委員を送って発言権を獲得する若手の権利斗争があった。若手の共同利用の権利，物性研の大学院問題，日米科学の問題等についての斗いがあり，また物小委参加は情報源としての意味があったが，本質的な議論は行なえず限界があった。日米科学等のある程度の成果も外での運動があったからこそできた。

一方，物小委のメンバーをみてもわかるように，主として旧帝大の利益代表的様相がみられ，従って将来計画に関する議論もおざなりで，物取り競争に堕してしまっている。若手の代表としては，そのような将来計画には関心がもてず，せめて物取り競争を紳士顔でなく物取り顔でやらせる努力をするのが精一杯であった。

§ 2. 共同利用と物小委の問題

「物性研はコネがないと利用しにくい」し，「内部の人との共同研究でないと利用できない。内部の人を含まない共同利用の便宜も計るべきである」。関西原子炉にいたことのあるある人は「研究員自身に直接関係のない仕事もしなければならぬと考えて来たが，物性研や基研の内部の人は共同利用研の意義をどの程度認識しているのだろうか」と指摘した。

「共同利用研は任期制にすべきである。」「基研・核研・物性研等，一諸に共同利用のあり方について総括すべきである。」「物小委は物取りの場に化しているが，将来計画は日本全体の見地からなされるべきである。」等の意見が出された。

§ 3. 地方大学の問題

「最近地方大学の理学部や，物理学科設置が増えているが，将来計画では何ら考慮されておらず，物性研究は大都市，特にD Cをもつ10の「中央」大学に集中している。人事交流や共同利用も殆んど「中央」大学間のみで行なわれており，中央の研究者は大都会を離れたがらないが，中央と地方の西方の流れを保証すべきである。地方大学の者が，共同利用に関する諸委員になっても解決にならない。大口の科研費も格差を助長している。自衛官問題や日米科学等

を問題にする若手もPDFを要求するだけでなく、何故積極的に地方に来ないか。その若手が存在するのも大きい大学だけである。科学の発達が善であるかどうかをも問えというが、それはぜいたくな悩みであり、地方大学の者にとっては研究をすることこそが反体制的行為であるともいえる。」

それに対し、「中央集権は本当にいけないのか、なぜいけないのか、あるべき姿は何か、そのようなものがあるのか」という問いが出された。

§ 4. 体制に丸がかえになった科学

「科学が体制化されたことを認識した現在、何をなすべきか、科学の進歩が直ちに善であるとする従来の見方は検討を要する」

「体制内では研究や教育の能率化は誤りである」

「いかなる体制であろうと研究者にとって生きる権利は研究する権利である」

「生きる権利は主張できるとしても、研究する権利は主張できるのか」

「各人被害者意識から出発し、身につまされたウラミ・ツラミを投げつけるべきである」

「被害者意識より加害者でもあることの認識が重要である」

§ 5. その他の指摘

「研究者としての立場からのみでなく、被害者として考えねばならない。最近大学入学者層が中間層に限られる傾向があることを重視しなければならない。」

「日本に科学の伝統、層の厚みを作る必要がある。」

§ 6. 今後のあり方

「若手や地方大学の代表を諸委員会に送るべきである」

「代表を送って何ができるか」

「百人委は権力をもたないからいろいろのことがいえるが、物小委で何ができるかは個人的能力にも関連ある」

「中にいて抵抗することはむづかしい」

「兎に角さし迫った百人委改選には、無自覚票でなく、広い意味の選挙運動をやってほしい」「物性グループの事務局報や物性研究を利用して活潑な意

見を出してほしい」

§ 7. お詫びとお願い

最後に司会者として反省しますことは、予め地方大学の問題に関心をもって幾分その問題について勉強しておりましたので、これに関する僅かな発言でも直ちに出席者の方々にも関心と理解をよび起したものと錯覚した点です。

この地方大学の問題は非常に重要です。若手の就職難が激化しつつある現在、数年後には「地方」大学に対して「中央」大学が殖民地を求める文字通りの「帝国主義」大学と化す可能性があり、そのとき初めて地方大学問題が認識されるのでは遅すぎ、且つ、その時では正しく問題がとらえられないと思います。中央大学の方の共同利用研に対する不満はそのまま地方大学の方から自分に向けられているということを認識すべきだと思います。本誌前号や本号に再録させて頂いた勝木氏の論文を是非御覧下さい。

なお、当日時間的制約もあり、司会者として発言を遠慮したが、一言補わせて頂く。

共同利用というものがかなり理想的になって希望者全員が参加できる研究会が開かれるようになったとしても、「業績主義」が根強くせちがらい現在では、研究会での卒直な討論から皆で何ものかを生み出して行こうという空気は容易に得られそうにない。個人の業績としての研究成果という考え方も打破し、相互不可侵のなれあいを排した学問批判をもっと行なうべきである。また最近指摘されているように、今迄の科学者の運動では、悪は常に自己の外あるものと考えて来たことを反省したい。

(文責 小 川)